

アシカキに紛れて水田に進出を図るか？  
イネ科多年生雑草のチゴザサ

森田 弘彦

筆者は1990年代の末、水田に発生するイネ科多年生雑草の簡易な識別法を検討した際にチゴザサ (*Isachne globosa* O.Kuntze 図-1) をこれに含めた。チゴザサは明治年間の末には水湿地に生育する植物として植物図鑑に収録されて(図-2) 人々に広く知られ、昭和年間の初めには北海道で「畦畔に生ず。(渡島) (田中一郎・岩垂 悟 「北海道に於ける水田雑草」, 1931)」と水田の雑草の一種に含められ、さらに昭

和年間の末には「池沼、用水路、畦畔などに群生するイネ科の多年生雑草で、水田には畦畔から侵入する。全国に分布するが温暖地、暖地に目立つ。(草薙得一「原色 雑草の診断」, 1986)」と認識されてきたので、1990年代に新たな問題雑草となったわけではない。しかし1990年代には、田の周縁部に生育してイネの群落内部にまで侵入することは稀、と筆者は考えていた。つまり、イネ群落の内部まで達するキシウズメノヒエやアシカキに比べて、チゴザサはイネの茎葉による遮光に弱いのではないかと推測していた。チゴザサについて「・・・あぜや水田のなかにも生える。繁殖力が強く、いちど水田にはいると除草しにくい (沼田 眞・吉沢長人「日本原色雑草図鑑」, 1968)」との記述があるものの、生育初期に空間の多い直播栽培の水田であってもイネの生育中期以降の繁茂は畦畔沿いに限られることをしばしば観察した(図-3) ことから、「水田のなかに」を「水田の中央部を含む広い範囲」と読み取らない方がよいと思う。

和名のチゴザサは「稚児笹」で、日本では優雅な植物名の代表格である。「チゴザサ」は江戸時代の絵入り百科事典である『和漢三才圖會 (寺島良安, 1712)』の「兒笹」に「知古佐佐(チゴササ)」と書かれたのが初出らしい。ここでは「高サ尺計葉最長細長八・九枚生於頂上」とあって多年生草本のチゴザサではなく、斑入りのササ(笹)で、このものは明治時代になって牧野富太郎博士によって「ちござさ 一名しまざさ : *Arundinaria variabilis* Makino var. *variegata* Makino

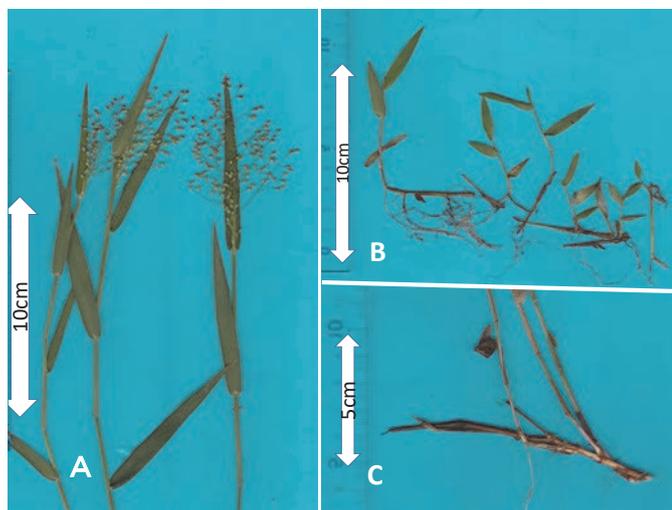


図-1 イネ科多年生雑草のチゴザサ (A: 穂をつけた稈, B: 8月に2節に切断された稈からの再生稈, C: ほふく稈からの分株)



図-2 明治年間後期の植物図鑑にみるチゴザサ (A: 東京博物学研究会「野外植物の研究」, 1907, B: 小笠原利孝「實用新案普通植物圖解」1909)



図-3 湛水直播水田の畔沿いに繁茂するチゴザサ (宮城県北部, 2020年8月)

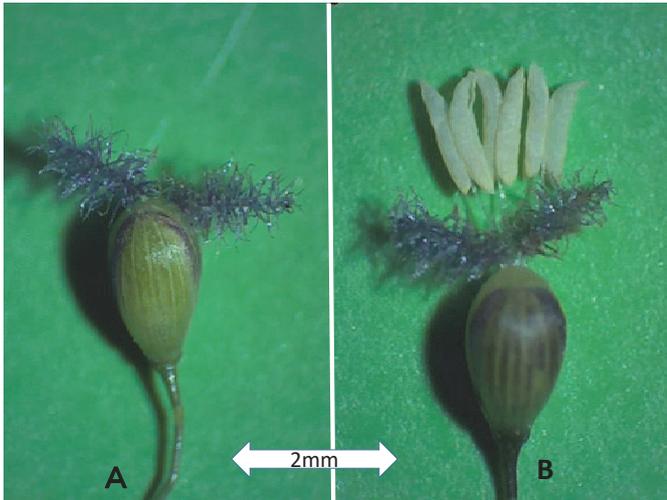


図-4 「紫の羽毛のような」柱頭を持つチゴザサの小穂 (A: 雌花期, B: 雄花期)

として紹介された(「植物集説 上」, 1935 所収)。

ねざさノ一變種ナル矮小ノ竹デ高キモノハ六〇糎内外ニ出入シテ居ル, 其葉ハ緑地ニ白色ノ間道ガアツテ頗ル美麗デアガ此白色ハ其葉ノ乾クトキ黄色ニ變ズル, ソシテ葉ノ裏面ハ細毛ヲ被フツテ居ル, 其葉ノ美麗ナルヨリ之レヲ庭園ニ栽植シテ賞翫セラル, 未ダ野生トナツテアルコトヲ見ヌ, (後略) (明治四十五年六月十日發行『サイエンス』第二卷第六號所載)

前出の明治時代の植物図鑑に草本のチゴザサがあるので、この時代には「チゴザサ」は同名異物であったことになる。草本のチゴザサの名称の起源はよくわからないが、いずれにしても雅な「稚児」を和名にいただく植物として、山野草のチゴユリ(稚児百合)や高山植物のチングルマ(稚児車)と並んで雑草界を代表しているのがチゴザサである。

茨城県南部で生物の教育に尽力された木村信之先生はチゴザサに優しい目を向けてその長所を引き出された(木村信之「続花に」, 1974)。

チゴザサ(稚児笹)は、その名にふさわしく、わりに小形で清楚な草である。(中略) 夏になると、茎の先に、あっさりした穂が立つ。穂は糸よりも細い枝をまばらにつけその先にアワ粒ほどの球をつけている。梅雨明けのころから、この球に、小さな紫の羽毛のような柱頭が首を出す。色に乏しいパラパラした穂に、この紫の羽毛は美しく目立つ。特にかすかな風にも細かにふれるのが印象的である。緑の、時にはそれがやや紫がかかる球は、やがてうす白くなって、これもまた人目をひくようになる。

この草が、堀の水ぎわに沿って長々と生え続き、あるいは、広い湿原や沼辺に生えひろがって夏の光と風の中に、紫の羽毛やうす白い球の入りまじった穂を、いっせいに立てているのは、心に残るすがすがしい眺めである。(後略)

木村先生が「紫の羽毛のような」と書いた柱頭はチゴザサの特徴で(図-4), 明治年間の末には「花柱羽状ニ分裂シ〔花色〕紫色ヲ呈シテ美ナリ。(東京博物學研究会「植物圖鑑」,



図-5 越冬芽の頂芽の節間が伸長するチゴザサ(A)とアシカキ(B) (-1: ほふくする頂芽と直立する腋芽, -2: 小舌, -3: ほふく稈の先端部)

1908)」と書かれ、さらに帰化植物やイネ科植物に関する多数の著作を残された長田武正先生の「検索入門 野草図鑑③ すすきの巻, 1984」では喜美子夫人がチゴザサの写真に次のコメントを付された。

このピンクはのびだしためしべの色。ファインダーでのぞくと、あんなにも美しかったのに、現像されて品の悪いのがっかり。自然の色には、とてもかないません。(喜)

イネ科植物にはチガヤなど紫色の柱頭を持つ種が結構あるが、チゴザサはその雅名に見合うだけの装備を持っているといえよう。

関東地方の平坦地では4月に入るとチゴザサは越冬芽から萌芽し、その頂芽は節間伸長してほふくし、頂芽の下の腋芽の下からのものは直立する(図-5A-1)。頂芽の節間が伸長してほふくするのはアシカキと同じ仕組みで(図-5B-1)、水田とその周辺での生育環境もほぼ重なる。先年の春に、畦畔から田に侵入するアシカキの防除試験に取り組みされたN県の農業専門技術員(専技)の方からその状況の画像を頂いた。画像の、畦畔からいっせいに田面に向かって伸びたほふく程に着く葉が、アシカキにしては目立たないように思われたので(図-5AB-3), 「念のためですが、チゴザサでは？」と尋ねたところ、後日「チゴザサでした。」との連絡を頂いた。葉身基部の小舌を確認すれば(図-5A,B-2) 両者を容易に識別できる。

アシカキもチゴザサも、ほふくを始めた程はしっかりと水分の多い方向に向かうように見える。畦畔から田面に向かう場合には重力が関係しているかもしれないが、そうでない場合には何か水分を感じ取る能力を備えているのかもしれない。N県でアシカキと誤認されたことを考慮すると、結構広い地域でアシカキに紛れて水田の畦や畦沿いとその周辺にはびこっている可能性があるため、読者諸賢のご確認をお願いしたい。